

アメリカ合衆国国立公園局における パークレンジャー養成システム

君島 俊克
千葉大学大学院

The Training System of Park Ranger
of National Park Service in the United States

Toshikatsu KIMISHIMA
Graduate School of Science & Technology, Chiba University

(受理日2004年6月7日)

1 はじめに

1.1 問題の背景と目的

アメリカは国立公園発祥の地であり、パークレンジャーの発祥の地でもある。また、アメリカの国立公園やパークレンジャーに関する出版物は、岡島成行の「アメリカの環境保護運動」や上岡克己の「アメリカの国立公園－自然保護運動と公園政策－」などの書物から、旅行ガイドブックにいたるまで、幅広く取り上げられている。しかし我が国では、パークレンジャー制度とその養成システムについて詳しく取り上げて報告された研究は少ない。さらに、パークレンジャーのトレーニング・カリキュラムに関しての報告はあるが本格的な研究はない。

そこで本研究の目的は、アメリカ合衆国におけるパークレンジャーの制度と養成について明らかにすることである。本研究においてアメリカの国立公園局によっておこなわれているレンジャー・トレーニングの現状とあり方について詳しく報告をすることは、わが国におけるレンジャーやインタープリターの研修などに参考となり有意義なことと思われる。

1.2 わが国におけるレンジャー・トレーニング

わが国においてレンジャーと呼ばれる環境省自

然保護官に対してもトレーニング（研修）は設定されている¹⁾。研修は埼玉県所沢市に所在する環境省環境調査研修所において実施される。研修には初級・中級・上級とクラスが設定されており、順にステップアップする仕組みになっている。研修の開催期間は5日間で、毎年9月上旬頃におこなわれている。内容は主に講義中心である。講義は、環境省職員の講師や大学教員、NGO関係者などの外部講師によっておこなわれる。

一方、民間におけるインタープリターなどの研修も盛んにおこなわれている。日本自然保護協会、キープ協会、CONE（自然体験活動推進協議会）など様々な団体によって実施されている。実施内容や方法は、それぞれの団体の特徴を反映されている。例えば、日本自然保護協会の自然観察員講習会は2泊3日で毎月おこなわれている²⁾。内容は、実習が12.5時間、講義が6時間である。主な自然観察の理念は、動植物の名前や生態を学習することではなく、自然を体験して、自然のすばらしさや神秘を感じることにあった。

また、CONEが実施しているプロジェクト・ワイルドの理念は、体験学習を通して、環境教育活動を行うものであるが、その教育の目的は、人的資源の最高かつ最善の利用あるいは保全にある、と明示されている（米国環境教育協議会 1999）。

2 パークレンジャー制度の成立過程と職務範囲

2.1 パークレンジャー制度の歴史

1898年、アーチャー・レオナルド(Archie Leonard)とチャールズ・レイディック(Charles Leidig)が最初のレンジャーという肩書きを得た。この2人はヨセミテ国立公園で雇用され、夏季は軍の補助をし、騎兵隊が撤退する冬季には、公園を警備する仕事をしてきた。国立公園局65年記念誌(National Park Service 1981)によれば、この2人のレンジャーはフォレスト・レンジャー(Forest Ranger)として指定され、陸軍直属の監督下で職務を遂行しており、給与は国有地事務所(Government Land Office)から支払われていた。現在パークレンジャーと呼ばれている職務に対して、1905年まではレンジャーの他にパーク・スカウト、バッファロー・キーパーなどの様々な名称が使われていた。そして各国立公園の警備などをおこなう身分であり、雇用形態は統一的なものではなかった。また、1905年に国立公園保護基金(National Park Protection)から給与が支払われるようになり、正式にパークレンジャーという名称になった(McKnight 1984)。

一方、1907年にルーズベルト大統領は、退役した将軍のS. B. M. ヤング(S. B. M. Young)にイエローストーン国立公園の管理責任者としての役職を任せた。ヤングは公園の管理計画について評定して、民間人による管理体制の議案を打ち出した。しかし議会はその提案を否決して、陸軍によるイエローストーン国立公園の管理を推し進めた。ところが1911年にメキシコとの戦争を背景に陸軍による公園管理を撤回させる案が再び起こった。その結果、内務省長官の同意を受けて国防省長官は、イエローストーン国立公園およびヨセミテ国立公園から陸軍兵士を全面的に撤退させ、セコイア国立公園およびジェネラル・グラント国立公園から一時撤退をさせた。1916年には、イエローストーン国立公園においても管理体制が陸軍から民間人に転換された。陸軍のイエローストーン国立公園分隊の隊員で、公園に留まりたいとの意志を持つ多くの隊員たちが、陸軍を退職して国立公園局の

非軍人のパークレンジャーとなった。(Hampton 1971)。その後1926年になってパークレンジャーは公務員となった。

1920年代までのパークレンジャーの主要な職務は、公園の境界のパトロール、密猟者や侵入者などの取り締まり、森林火災の消火活動、さらに道路や散策路の整備などであった(National Park Service 1981)。1920年代頃からパークレンジャーの職務に変化が生じてきた。公園利用者の増加や自動車利用の急激な増加に伴って犯罪や周辺住民との問題が増加し、交通取り締まりや法の執行が増えた。それに加えて、キャンプ場の管理、解説活動、資源保護活動などの職務が増加した(McKnight 1984)。

その影響から、国立公園局の法執行に関する方針が変更された。その転換のスピードは、当時のパークレンジャーや公園管理者の対応が間に合わない程であった。そのためさらなる犯罪の増加、幾人かの利用者による敵意のある行動が起こり、ついには1970年に起きたヨセミテ暴動³⁾が最終的に国立公園局の変革を決定づける結果となった。内務省長官と国立公園局長による法執行に関する声明は、1976年の「包括的職権法(General Authorities Act)」の制定にいたることとなった。包括的職権法の施行により、パークレンジャーは法執行に関するトレーニングを受けることが義務付けられ、公園内において主体的に法執行をおこなうようになった(McKnight, 1984)。

2.2 パークレンジャー・トレーニングの制度的整備

包括的職権法を受けて国立公園局長が提出した、パークレンジャーによって法執行に関する職務をおこなうためのトレーニングに関する議案も通過した。法執行の職務に就けるパークレンジャーは、常勤レンジャー(Full Time Ranger)と非常勤レンジャー(Seasonal Ranger)の2種類がある。常勤レンジャーの法執行に関する職権は、消防自動車の運転、逮捕権、許認可権、その他あらゆる種類の調査などである。また、非常勤レンジャーの法執行に関する職権は消防自動車の運転、逮捕

権、交通事故に関して限定された調査および公園内におけるマナー違反に関する権限である (National Park Service 1980)。

一方、1977年6月21日、会計局 (General Accounting Office) は「連邦レクリエーション地域における犯罪」という報告書で、国立公園局 (National Park Service)、森林局 (Forest Service)、魚類および野生生物局 (U.S. Fish and Wildlife Service)、全米技術者団体 (U.S. Corps of Engineers) やテネシー流域開発公団 (Tennessee Valley Authority) などの資源管理系官庁による法執行の現状を明らかにした (General Accounting Office 1977)。その報告書によって、似たような法執行の役割を持つ官庁同士の連携と法執行を行う人材のために、よりよいトレーニングの必要性が強調された。この報告に対応して、それらの官庁はジョージア州グリントにあるフェデラル・ロー・エンフォースメント・トレーニング・センター (Federal Law Enforcement Training Center: 以下FLETC) で会合を持ち、基本的なトレーニング・プログラムの実行と土地管理部署のための基本的な法執行を決定させた。この決定により、これら所管官庁の法執行に関する職員は、FLETCにおいて、研修をすることとなった。このトレーニング・プログラムは、1978年10月から実施された (National Park Service 1998)。

その結果、国立公園局は法執行に関する職務を遂行するすべてのパークレンジャーに訓練を義務づけた。その結果1978年1月1日をもって、すべての有資格の常勤および非常勤レンジャーが法執行に関する職務を遂行することとなった。ところが、その影響で法執行を遂行できる有資格レンジャーの人数が大幅に減少した。ヨセミテ国立公園では、1976年には120名のレンジャーが法執行を遂行できるように登録されていたが、この制限が施行された1978年には34名になった (U.S. Congress, House Committee on Government Operations 1978)。

一方、法執行以外の面ではミッション66¹⁾によって国立公園局内に常勤職員のために2つのトレーニング・センターが創設された。解説業務に関

するトレーニングのためのステファン・マーサー・トレーニング・センター (Stephen T. Mather Training Center) と、主に管理トレーニングのために利用されるホーラス・オルブライト・トレーニング・センター (Horace M. Albright Training Center) である。今日では、レンジャー・トレーニングをおこなうために11のトレーニング・センターがある。

2.3 パークレンジャーの職務

アメリカの国立公園において、国立公園内で就労する職員は、事務員や設備管理者なども含めて、一般的にすべてパークレンジャーと呼ばれている。しかし、自然・歴史・文化などの解説 (インタープリテーション) をおこなうのは、その中でもパークレンジャー職と呼ばれる職務についた者だけである。

一方、現在国立公園局には常勤、非常勤合わせて2万人以上の職員がおり、約9万人のボランティアがいる (National Park Service 2000a)。国立公園局職員の職種は大きく7種類に分かれており、さらにそれぞれの職種の中で職務が分化されている (National Park Service 1987)。以下に国立公園局職員の職務を示すことにしたい。

①パークレンジャー職 (Park Ranger Careers)

パークレンジャーは、国立公園および他の管理地域において監督・管理を行い、自然保護と資源の利用を図る。

パークレンジャーは、自然発火および人災による山火事の制御、公園管理に関する設備・資材の保護、自然物、歴史的財産、科学的な情報などを収集し、それらに関する解説に重要といえる教材の解釈ならびに開発を行う。また、先住民族などの芸術や手工芸などの展示を行う。加えて、法律に従った各種取り締まりを行い、違反事項、陳情、不法侵入および侵害や事故の調査ならびに捜索・救出活動を行う。そして、歴史的、文化のおよび自然の資源 (例えば野生生物、森、湖畔、海岸、歴史的な建物、戦場、考古学的な資料とレクリエーション地域) の管理を行う。

さらにこの職務では、キャンプ地におけるテナサイトの割り当て、薪の補充、安全点検の実行、利用者への情報提供、利用者に対する自然散策ツアーのガイドなどの職務を含み、キャンプ地の管理を行う。ただし、具体的に実施される職務の内容は、役職、管理地域の違い、その他特定の地域的要求などにより違いがある。

パークレンジャーの勤務場所は、都市、郊外、および原生自然といったあらゆる地域であり、全パークレンジャーの人員の半数以上は、ミシシッピ川より東側の地域に配属されている。パークレンジャーは屋外での職務遂行が主であるものの、事務所に勤務することもある。また、各パークレンジャーの経歴によって国内の様々な地域に配属され、そこでの勤務状況を鑑みて配属先が変更されることもある。

パークレンジャー職に就くために大学および大学院教育で必要とされる主な研究領域は、天然資源管理、自然と地球科学、歴史、考古学、人類学、公園とレクリエーション管理、法執行・警察科学、社会科学または行動科学、博物館学、ビジネスまたは管理、社会学または自然資源や文化的資源の管理および保護に関する分野・専攻などである。

一般的な実務経験としては、管理部門、専門的な分野、技術分野、調査・研究分野、または自然、文化的な歴史、魚類、野生生物の個体生活圏、資源の保護および利用に関する技術、火災の防止および制御などに精通していること。また、一般人に対して人間関係の技術の訓練をした者とされている。それら専門的な知識、技能、能力などの提示が必要であり、職務遂行に当たり、それらをもとに配属される。

②事務職、事務官および事務補佐官 (Administrative Careers)

人事、予算、備品調達、そして資産管理など。

③設備管理、備品調達および技能職 (Maintenance, Trade and Craft Careers)

道路、歩道、建築物、広場などの管理など。

④設計および工事に関する職務 (Designed Construction Careers)

技術者、建築家、景観設計者、レクリエーション

計画者などによる設計および工事など。

⑤公園警察官 (Park Police Careers)

事故と犯罪の予防と調査、違反者の逮捕、非常事態状況における市民の援助、大集会での群衆制御などを行う。

⑥警備員 (Guard Careers)

連邦に所管される資産や建造物の保護など。

⑦その他 (高度専門分野職員)

○生物科学分野：生物科学分野における自然についての研究である。

○自然科学分野：地質学、水文学および地図学のような自然科学分野の職種が存在する。

○文化資源分野：公園制度におけるの文化的な資源に関するプログラムを遂行する。

○土地取得分野：土地獲得、土地評価および不動産の専門職。

○博物館職員：展示計画、資料収集管理および博物館での教育活動を行う。

○記者、出版、情報公開専門職、接客専門官：出版および情報公開プログラムに関する職種が必要とされている。

3 パークレンジャー養成に関する考察

3.1 国立公園局のトレーニング・センター

国立公園局の11のトレーニング施設には、他の官庁と共管して利用するものも含まれているが、それぞれの施設において国立公園局職員としての公園管理、運営、解説活動、法的取締りなどに関する講座が設置されている。その中の2つ、ホーラス・M・オルブライト・トレーニング・センターとステファン・T・マーサー・トレーニング・センターは、それぞれの専門領域において国立公園局の発展や運営に関して中心的役割を果たす施設である。またFLETCは、法執行官のトレーニングで重要な役割を果たしている。なお、国立公園局におけるトレーニング制度は1994年に変更されている。それ以前のインタープリテーションに関するトレーニングは小野が自身の経験を基に報告している(小野 1991)。小野によれば、当時の研修は初級と上級に分かれており、初級はそれぞれの地区がおこない、上級はハーパス・フェリ

ー・センターでおこなわれていた。トレーニング制度の変更は1991年のコロラド州ヴェイルでおこなわれた国立公園局75周年シンポジウムで参加者の合意を受けて、1994年に公表された(National Park Service 1994)。

そこで本章では現行のプログラムで、パークレンジャーの自然解説に関するトレーニングをおこなう、ステファン・T・マーサー・トレーニング・センターを主に取り上げる。

3.1.1 ステファン・T・マーサー・トレーニング・センターの沿革

ステファン・T・マーサー・トレーニング・センター(Stephen T. Mather Training Center: 以下マーサー・トレーニング・センター)のインターネットによる公開資料によると、その沿革は以下の通りである(National Park Service 2000b)。

このセンターは、パークレンジャーとパーク・マネージャーのための解説トレーニングおよび研究施設として、1964年に正式に創立された。公園を運営する上で、解説業務から歴史的建造物の補修に至る広範なトレーニングは、その必要性に応じて現在のカリキュラムにまで発展してきた。現在では、年間1,500人の訓練生が1週間もしくは2週間のトレーニングコースを修了している。

このセンターはウエストバージニア州ハーバース・フェリーのキャンプ・ヒルに位置している。使用される建物は、黒人のための高等教育において、全米でもっとも早い時期に創立された大学の一つだったストアー・カレッジ(Storer College)の校舎である。

1962年、国立公園局によってストアー・カレッジの建物が取得された。老朽化したいくつかの建物は取り壊され、残った建物は大規模な修復や修理がされた。そして、初代国立公園局長の名を冠したマーサー・トレーニング・センターが正式に設立されたのである。

センターは主に2つの建物から構成されており、以前ストアー・カレッジのアンソニー・ホール(Anthony Hall)だったワース・ホール(Wirth

Hall)は元国立公園局長のコナード・ワース(Conrad Wirth)の名を冠して、教室と管理事務所の建物となっている。そしてストアー・カレッジのクック・ホール寮(Storer's Cook Hall Dormitory)は、現在も国立公園局訓練生の寮として使用されている。また、キャンパス内の他の建物は、マーサー・トレーニング・センターとハーバース・フェリー・解説計画センター(Harpers Ferry Interpretive Design Center)の共用として使用され、国立公園体系を通じた解説業務メディアの開発と発展などを行っている。さらに、以前ストアー・カレッジの図書館だったアンソニー図書館(Anthony Library)は現在も訓練生と研究者によって利用されている。

センターで行われている幅広いトレーニングは、国立公園局独特のプログラムと理念を発展させるように計画された。制服を着用した職員は国立公園における自然資源と歴史的所産の解説のための責任があり、広範なコミュニケーション技術の集中トレーニングをここで受ける。また、管理と事務運営、文化資源、危機管理、そして利用者管理などのいくつかのコース、分科会、遠隔学習の機会などやプログラムへの参加などが、サービスマネージャーのために用意されている。

3.1.2 マーサー・トレーニング・センターでのカリキュラム

マーサー・トレーニング・センターでは、総合的に様々なトレーニングが行われているが、解説活動に関するトレーニングの中心的役割を果たしている。表1に示したものは、パークレンジャー職として採用された職員のための解説業務に関するトレーニングのカリキュラムである(National Park Service 2000b)。トレーニングのレベルは4段階に分かれており、その中でさらに分化された内容となっている。また、追加的發展(Additional Development Opportunities)という部分には各レベルでの補講的な講座が用意されており、各レベルにおいてさらなるトレーニングができるようになっている。

このセンターの沿革から、設立の目的は解説業

表1 マーサー・トレーニングセンターにおける解説トレーニング・カリキュラム

モジュール	コース・タイトル
すべての解説員を対象とした基礎レベル	
101	国立公園局の使命の達成：解説業務のプロセス
初級レベル	
102	利用者に対しての効果的な実演
103	効果的な解説のための準備と実演
中級レベル	
210	アクティビティーを先導するための効果的な準備と実演
220	解説活動と図解プログラムの準備と実演
230	効果的な解説文作成
270	カリキュラムに基づいた教育プログラムの効果的な発展と実演
上級レベル	
310	公園における解説業務の計画
311	解説メディアの発展
330	解説者の指導：トレーニングとコーチ
340	解説の研究と資源に関する連絡
追加的發展	
110 (基礎)	利用者のニーズと特徴
111 (基礎)	個人的な安全と防護
201 (中級)	解説プログラムおよび教育プログラム作成からの偏見の発見と除去
320 (上級)	解説業務におけるパートナー
440	考古学的資源の解説

務に関係するパークレンジャーのトレーニングと、それに伴う研究のためであったことが分かり、この施設は、国立公園局における環境教育の拠点でもある。表1に示した解説トレーニング・カリキュラムはレベル分けがされており、新人教育だけではなく段階的なものとなっている。したがって、パークレンジャー個人が現在の職能にあわせて、ステップアップのために受講することが分かる。さらに、いわゆる本コースといえる各レベルに加えて、追加的に各レベルに合わせた任意の補習授業も用意されており、カリキュラムの充実度がうかがえる。

また、各レベル・各コースについて分化された授業が用意されている。授業は講義、実習、実演など様々な手法で授業が進められている。その中で、表2のシラバスの要約例にあるように、各授業には学習目標が設定されている。授業の段階的流れは、初級レベルでは主に解説業務の基礎的な意義と技術に重点が置かれたカリキュラムとなっており、中級レベルになると国立公園における教育的な部分についての授業が設けられるのと同時に、教育活動の主体者としての準備や実行に関する部分が増す。上級レベルでは、国立公園における解説業務の計画や指導者養成的部分といった、

いわゆる管理職的な内容となっている。そして、それら授業は、アプローチや授業内容のあらましなど、詳細な部分まで設定されている。その内容を表3ならびに表4を用いて詳しく見れば、以下のようにまとめられる。

基礎レベルおよび初級レベルでは、訓練生自身の解説の技術を向上させるためのテクニックを学ぶことが分かる。基礎レベルのパークレンジャーは、大学または大学院で特定の学問を専攻した者であり、必要な自然科学などの知識はあるが、解説活動の技術については初心者である。そういった新人パークレンジャーのための解説テクニックを指導することが、重要であることは言うまでもない。さらに、マーサー・トレーニング・センターの資料の中に「知的な部分と感情的な部分を融合させ、自然資源の意味を知る」という言葉がしばしば記されている。国立公園を訪れた人々が、自然資源の持つ意味を「知」と「感」によって読み解き、自然資源の重要性を理解することは、自然環境保全のために重要である。そのためのインタープリターを養成しており、これは国立公園局の理念ともいえる。さらに各授業目的を見れば、サービス、情報、解説手法など、新人パークレンジャーへの教育として、解説に関する基礎的で詳

表2 マーサー・トレーニング・センターにおけるシラバスの要約例

モジュール102：クオリティー・サービス：聴取者の求めること			
目的	解説活動における利用者との相互関係や、きめ細かく適正なサービスができるように訓練する。		
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・自然講座の聴取者の求めることを評価し、適切に答える。 ・自然講座の聴取者たちと接する場面において、有効な対人関係を持ちいて自然講座を実演する。 ・どのようにして利用者に対して質の良いサービスが出来るかを実演する。 		
アプローチ	<ul style="list-style-type: none"> ・このクオリティー・サービスの講座は、本講座のみで完結して学ぶこともできるが、同じモジュール102の「利用者に対しての効果的な実演」の講座と組み合わせて、より効果的に学ぶことが出来る。 ・解説業務が行われる場所は様々である。それらの場面で、コミュニケーションの技術を有効に使うことにより、質の高いサービスとする機会を増やすことが可能となる。 		
授業内容の あらまし	I. 状況の設定	場所、利用者のなかで	
	II. 評価	A. 利用者による解説場所の評価	見た目、明るさ、無人によるサービス
		B. 利用者による職員の評価	プロとしての身なり、態度/丁寧さ、正しい観点から物事を見る、安全の確保、人情味がある、近づきやすさなど
		C. 職員による利用者の評価	身なり、態度/丁寧さ、正しい観点から物事を見る、安全の確保、人情味がある、近づきやすさなど
	III. コミュニケーション	A. ことば	言語、声の高さ、言い回し、アクセントなど
B. 言葉以外		ボディ・ランゲージ、空間の使い方、アイ・コンタクト、服装など	
C. 聞き取り			
D. 不満などの解決			
E. 基礎知識/情報の正確さ			
IV. 相互作用	A. 解説の初期段階、持続、まとめ		
	B. 相互に作用し合わないとき		
V. 総括的評価	クオリティー・サービスにおける技術の適応を学ぶ		

細な部分にまで言及した授業がおこなわれている。

次に、中級レベルにおける各モジュールでの目的は、解説手法の発展から始まり、解説書の作成といった、解説に関するより高度な部分に入る。さらにモジュール270では6単元を使い、教育活動としての解説を扱っている。国立公園における解説活動は自然教育であることを明確にしている。教育をおこなうために必要な教育理念、学習理論など教育の実施者として必要な事柄を学ぶ機会をパークレンジャーに与えている。

上級レベルにおいては、解説計画の立案および指導者育成に重点が置かれる。効果的な解説活動がおこなわれるための解説プログラムの作成やメディアを利用した解説計画など、各公園において解説活動をおこなう一般のパークレンジャーの活動するための素材となる重要なことがらを学ぶ。さらに指導者を育てるために、リーダーシップ論

や後進のトレーニングの計画、運営、実施、評価、指導、監督などを学ぶ。また追加的発展としての講座においては各段階において、利用者の理解を深めたり他団体とのパートナーシップについて学ぶ。

このように明確な目的を示した上で、段階的に組まれたカリキュラムにより解説業務を現場で実施しているパークレンジャーは、個々のレベルにおいて効果的に解説能力を向上できる。このようなカリキュラムの発想は、教育的な配慮や組織的な部分などを考慮すると同時に、利用者にも最高の解説サービスを提供するためにも効果的といえる。

また、国立公園局は解説業務を教育活動と位置づけていることはこれまでの資料が示している。この事実は、国立公園における解説業務は明らかに社会教育活動であり、その実施者としての人員を意識的に養成することを示している。このよう

表3 各モジュールの目的

モジュール	目的	要点
102	解説者が利用者の要求を適正に評価することができ、選択的に反応し、基礎的で詳細な情報を与え、利用者の知的の部分と感情的な部分を融合させ、自然資源の意味することを解説できるようになる。	解説のテクニック
103	自然資源の持つ意味を利用者の知的な部分と感情的な部分とを結合させ、利用者に発展的な考えを提供する。そのため、このモジュールでの授業は公衆に話すための主要な部分が網羅されている。	解説のテクニック
210	モジュール101、モジュール103、モジュール110を基礎としている。解説話法の比較検討を行い、各アクティビティーにおいて参加者に触れることのできる自然資源への機会を増やすように案内するようになる。	解説のテクニック
230	解説書作成者としての専門的な発展のための枠組みについて授業を行う。	解説書作成
270	教育団体に対してのカリキュラムに則したプログラムを各解説者の知識と技能に焦点を当てて発展させる。	教育プログラムとしての解説
310	解説のレベルと解説のプランの作成過程、そして、どのようにしてより効果的な解説プログラムの決定を行うかなどについて学ぶ。	解説プログラムの作成
311	モジュール101、モジュール110、モジュール230、モジュール310を基礎として、現場の解説業務担当者のために、計画専門家として解説業務を発展させる。	解説計画
330	解説のトレーニングをすることとコーチをすることは統合された技能によってなすことのできる結果のひとつである。他者を通して利用者へ、自然資源の意味と利用者の知的な部分と感情的な部分を連動させることを目的とする。	指導者育成
110	利用者の動機は自発的な興味などであり、それらを見いだすことである。	利用者の理解
111	制服職員は様々な状況で市民に接する機会がある。そのような状況の中、国立公園での犯罪や危険が増大している。また、職員は単独で外界と遮断された地域に行くこともある。様々な状況で、他者の救援が得られない場合がある。そのような状況下での安全の確保について学ぶ。	危険回避
201	肌の色、言語、性差、身体的能力、人種などは、特に低年齢の利用者には偏見をもたらしている。国立公園局の実施する解説プログラムは、教育的にカリキュラムされて実施されるよう、そのような偏見を見だし、取り除く。	教育プログラムとして偏見の排除
320	国立公園局外の団体、NPO、パークボランティア、大学、企業などとのパートナーシップは解説に必要な資料やサービスを作り出す。上級の解説者はそれら団体との正式な契約書を取り交わす方法などを理解しなければならない。	他団体とのパートナーシップ

表4 各授業における目的

モジュール	授業題目	目的	要点
270	国立公園局教育プログラムの歴史と役割	国立公園局設立以前から教育的活動はあった。また国立公園局の教育活動は年を追うごとに進歩してきた。その進歩と教育理念を学び、今日的課題を探る。	教育理念
	カリキュラムとは?	教育プログラムはカリキュラムに則した解説プログラムである。教育を受けるグループのカリキュラムをより充実したものとするための知識を学ぶ。	教育としてのカリキュラム
	学習と発達入門	児童生徒のグループに対しての学習理論とその枠組みを学び発展させる。	学習理論
	教育団体との協同	国立公園を訪れる学校や成人のグループの興味の対象、学習のねらい、目的などを理解する。	学習者の目的
	プレゼンテーション・テクニック	学習グループを先導するためにもっとも適したテクニックを選ぶために、様々なプレゼンテーションのテクニックを紹介する。	プレゼンテーション技術
	教育プログラムとしてのカリキュラムの発展	学習グループに対して、カリキュラムに即した教育プログラムをより効果的に解説するためのものである。	教育的な解説

に、教育活動を前提として解説員を養成することは、国立公園を環境教育の実施施設として位置付けていることであり、大いに注目すべき点といえる。

4 おわりに

本研究で明らかになったことを整理すると、以下ようになる。

- ①パークレンジャーの歴史は国立公園局よりも古い。職務では1920年頃から変化が見られ、ミッション66や包括的職権法などの制定によって、国立公園における法執行および解説業務が充実した。
- ②国立公園局職員の職種は多彩であり、その中のパークレンジャー職が解説業務をおこなっている。
- ③国立公園局には11のトレーニング施設があり、マーサー・トレーニング・センターで、解説活動に関するトレーニングがおこなわれている。
- ④マーサー・トレーニング・センターでは、教育の目的が明確であり、それぞれのレベルのパークレンジャーに対して、適切なカリキュラムが用意されている。
- ⑤マーサー・トレーニング・センターのトレーニングは、自然解説活動を教育活動と位置付けており、中級レベルから教育の実施者としてのトレーニングがおこなわれている。

以上のことから、本報告の目的である、アメリカ合衆国におけるパークレンジャーの制度と養成について明らかにすることができた。

一方、わが国においてレンジャーと呼ばれる環境省自然保護官の研修は米国国立公園局におけるレンジャー・トレーニングと比較した場合に違いが大きい。わが国と米国では国立公園の設置基準は違う。また、国立公園を管理する官庁の政治的な立場の違いなど、様々な要因がある。したがって一概に比較することは難しい。しかしインタープリテーションを実施する現場において、インタープリターのトレーニングによる技術的差異はあるだろう。わが国では、自然保護官の研修は主に

講義中心の活動であり、国立公園管理の理念や手順、さらに自然保護に関する考え方などが講義されていた。しかし、表4に示したマーサー・トレーニング・センターの授業目的を見れば、より具体的な内容になっていることが分かる。さらに授業が細かく分化されており、体系的に構成されていることが表1のカリキュラムで理解できる。また、自然保護官の研修は講師によって授業が組み立てられるが、表2に示したシラバスによって、マーサー・トレーニング・センターでは均一に近い授業内容が設定されている。

本報告で紹介した、パークレンジャー養成システムが、わが国におけるインタープリターのための研修に多少なりとも参考になり、更なる発展を遂げることを望む。

注

- 1) 筆者による聞き取り調査による。
- 2) 筆者調査による。筆者が講習会に参加することによって、フィールドワークを実施した。
- 3) ヨセミテ暴動とは、1970年7月4日にヨセミテ国立公園で起きた暴動で約500人の若者が反社会的行動を起こした。そのため、常勤レンジャーに加え保安官やハイウェイ・パトロールや消防士などに応援を要請して取り締まった。174人の逮捕者を出して終結した。
- 4) ミッション66とは、1955年に開始された政策である。朝鮮戦争など、様々な政治的背景によって国立公園局の予算が減少したことと、利用者の増加に伴って、公園の管理が困難になったことによって実施された政策である。その目的は、国立公園制度の発展とアメリカ市民として賢明な利用を促すためであり、国立公園を利用するすべての利用者の最大限の享受、卓越した景観・科学的資産・野生生物および歴史的遺産を最大限に保護することとされた。この政策は、質的および量的な利用者へのサービスのため、また施設および職員の充実において、利用者や資源の保護に最大限の保証をするために意図された。

引用文献

- General Accounting Office, 1977, Crime in Federal Recreation Areas, 1977, 3.
- Hampton, H. Duane, 1971, How the U.S. Cavalry Saved Our National Parks, Indiana University Press, 179.
- McKnight, R. Michael, 1984, The Law Enforcement Function of The National Park Ranger, California State University, Long Beach, 43-52.
- National Park Service, 1998, Land Management Training Program Syllabus: I, Department of the Treasury Federal Law Enforcement Training Center, Glynco, Georgia.
- National Park Service, NPS-9, 1980, 8.
- National Park Service, 1981, 65th Anniversary of the National Park Service, Washington D.C.
- National Park Service, 1987, National Park Service Careers, Washington D.C.
- National Park Service, 1994, Employee Training and Development Strategy, Horace M. Albright Training Center, Grand Canyon, Arizona.
- National Park Service, 2000a, National Park Service Employee Training and Development Annual Report for Fiscal Year 1999.
- National Park Service, 2000b, 国立公園局のホームページによる公開資料 (Interpretive Competencies), www.nps.gov/idp/interp/ab-competency.htm.
- U.S. Congress, House Committee on Government Operations, 1978, Crime in federal recreation areas: Hearing 95th congress, Second Session, Washington D.C. , 35.
- 米国環境教育協議会, 1999, プロジェクト・ワイルドー本編: 活動ガイド, vii.
- 上岡克己, 2002, アメリカの国立公園: 自然保護運動と公園政策, 築地書館.
- 岡島成行, 1990, アメリカの環境保護運動, 66-95, 岩波書店.
- 小野佐和子, 1991, アメリカのインタープリテーション, 国立公園, 490: 38-43.